



イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 545 回 ディス化された会議はやめなさい！

2013.10.6

以前、このコラムに「スマホ依存症」の事を書いた(第 542 回)。

以降、やっぱりスマホが気になって仕方がない。電車に乗ると、ほとんどの人が下を向いて黙々とモバイルと睨めっこしている。車窓から見る溢れ出る人の流れ、街の賑わい、移りゆく季節の変化など全く意に介せずと言った光景は、尋常でない異様さを感じる。

そこに人がいて、ライブの風が流れ、リアルの実社会があるにも拘らず、触れ合おうとしない、まるでみんな同じの大量生産された機械のロボットでも見ているようで…、気色悪いと思うのは小生だけだろうか。

モバイルの便利さは、小生といえども、ほどほどに知っているつもりだ。

でもたぶん、使い方の **TPO** (Time、Place、Occasion) に問題がありそうだ。

一刻も早く情報が知りたくて、ついつい、モバイルに触れてしまうタイプも多いようだ。

人によっては、のべつ幕無しゲームにいそしんでいるらしい。

たかが数センチ四方の小さな画面で、迫力のないゲームが止められないでいる。

要は、気になって、気になって症候群が直接対話によるコミュニケーションの機会を減らしている。最近この症候群が、会議やビジネスの中まではびこってきた。

さあ、やるぞ！と意気込む議長役の上司、熱い思いを語り、クリエイティブな意見を熱心に求める上司、そんな上司の顔も見ず、黙々とモバイルと睨めっこする会議では、「**スマホ禁止**」と怒鳴りたくなる上司の気持ち、分るような気がする。

会議の目的を勘違いしてはならない。会議は貴重なコミュニケーションの場である。

コミュニケーションが必要ないのであれば、一方的指示や告知、トップダウンの通達でよい。

会議は単なる情報を交換し、確認するだけの機会ではないはずだ。

意思疎通と、情報ではなく**意見の交換**が無ければ会議の意味をなさないと思う。

「Face to Face」…互いに顔を突き合わせてという行動は、メールや電話のやりとりだけでは得られない空気がある。アイコンタクトや表情、あるいは身振り手振りも含めた、「言語を超えたコミュニケーション」を増やすと思っている。

組織を強くするには、そのメンバーお互いを知ることが重要だと言われている。大事なものは「情報の共有化」ではなく、組織の各メンバーが「他メンバーの誰が何を知っているか」を知っておくこと、これを「**トランザクティブ・メモリー**」といい、組織全体としての知識を増やす鍵となる。この「トランザクティブ・メモリー」を高める基本的手法の第一歩が「会議」である。

人としての触れ合いのない**ディス化 (dis-communication) された会議**から、コミュニケーションは生まれえない。